

食とケイパビリティ

かつて障害者たちは叫んだ。「私たちのことを私たち抜きで決めないで！」と。それぞれの立ち位置だから見えること、そこからしか見えないことがきっとあります。第2回サマーセミナーの目的は、互いの視座を交錯させながら、未来を共に展望することにあります。

2025年7月30日 帝京大学八王子キャンパス

ソラティオスクエア 20階第3会議室LR

参加費無料

第Ⅰ部 <共に在る>を学び、習う

- 10:00～10:05 開会の辞 外国語学部 教授 大野雅子
司会進行 教職研究科 教授 荒巻恵子
- 10:05～10:45 外国語学部 教授 宇多浩「食の倫理の未来—個人の自由はどこまで可能なのか？」
短期大学人間文化学科 准教授 上田仁志「吉本隆明の〈食〉思想」
- 10:45～11:25 高等教育開発センター 講師 蔡薰婕「当事者の語りにみる乳癌と食」
文学部社会学科 教授 渡辺浩平「ごみの研究」
- 11:25～12:05 外国語学部 准教授 西向堅香子
「在日外国人が抱える困難と在日アフリカンが直面する人権課題:社会調査実施に向けた展望」
外国語学部 准教授 加藤恵美
「まちがミュージアム」プロジェクト:在日コリアンの記憶から」

12:05～13:40 昼食 サンドイッチ(別途料金1000円)

第Ⅱ部 私たちはいま、何ができるか、何をなすべきか？

13:40～17:00

小野塚知二 「食文化の隆盛と危機の同時進行—英国と日本の経験」
東京大学名誉教授、東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム特任教授。
専門は、西洋経済史。食文化に精通。近年では野良猫の研究も。

コメンテーター 大野雅子(帝京大学 外国語学部 教授)

後藤玲子 「ケイパビリティ・アプローチとは何か」

帝京大学経済学部・先端総合研究機構兼任教授、一橋大学名誉教授。専門は経済哲学、規範経済学、社会的選択理論。

コメンテーター 松浦司(中央大学経済学部 教授)

18:30～20:00 懇親会・学会のレストラン(会費5500円)

7月23日までに下記のフォームにてお申し込みください

<https://forms.gle/BiKyKHUi29exPZ5L8>



小野塚知二 「食文化の隆盛と危機の同時進行―英国と日本の経験」

食は人間にとって最も根源的な営みですが、それはいま臨界点に差し掛かかっています。その一つが祭事のご馳走の消滅で、それは世界各地で遅速や程度の差はあれ、進行し、人が食を主体的に行う能力を退化させています。台所から刃物や火がなくなり、季節性食材や在地食材が消え失せ、世界中どこでも一年中手に入る食材がわたしたちの食のほとんどを占めています。調理方法やその様式感も多様性を失い、いくつかの型に収斂しています。人が介在しない食の一手前まで差し掛かっているのが臨界点の意味です。食の臨界点の実相を英国の二世紀半の経験と日本の現状に注目して解き明かします。

東京大学名誉教授、東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム特任教授。専門は、西洋経済史。食文化に精通。近年では野良猫の研究も。

主要な著書：

『主権国家と革命：15～18世紀(岩波講座世界歴史第15巻)』(岩波書店、2023年)共著

『経済史・経営史研究入門：基本文献,理論的枠組みと史料調査・データ分析の方法』(有斐閣、2022年)共著

『東京学派の研究 ―総合シンポジウム―』(東京大学東洋文化研究所、2022年)共著

『共同体の基礎理論 他六篇』(岩波文庫、2021年)共著

『自由と公共性: 介入的自由主義の時代とその思想的起点』(日本経済評論社、2009年)単著

後藤玲子 「ケイパビリティ・アプローチとは何か」

理論経済学から生まれたケイパビリティ・アプローチは、きわめて単純な構図をもちながら、経済学はもとより諸科学への応用範囲が、実に広いアプローチです。その基本思想は、「手元にあるもの、やりくりしたら、もっとこんなこともできるでしょ」です。背後にある「自由」と「尊厳」の思想は、混迷する現代社会の難問に立ち向かう力を持ちます。本報告では、対話を通して、その秘めたる力を一緒に引き出しませんか。

帝京大学経済学部・先端総合研究機構兼担教授、一橋大学名誉教授。専門は経済哲学、規範経済学、社会的選択理論。

主要な著書：

Dignity, Freedom and Justice, Springer, 2024(共編著)

The Ethics and Economics of the Capability Approach, Springer(単著), 2020

『福祉の経済哲学』(単著, ミネルヴァ書房、2015 年)

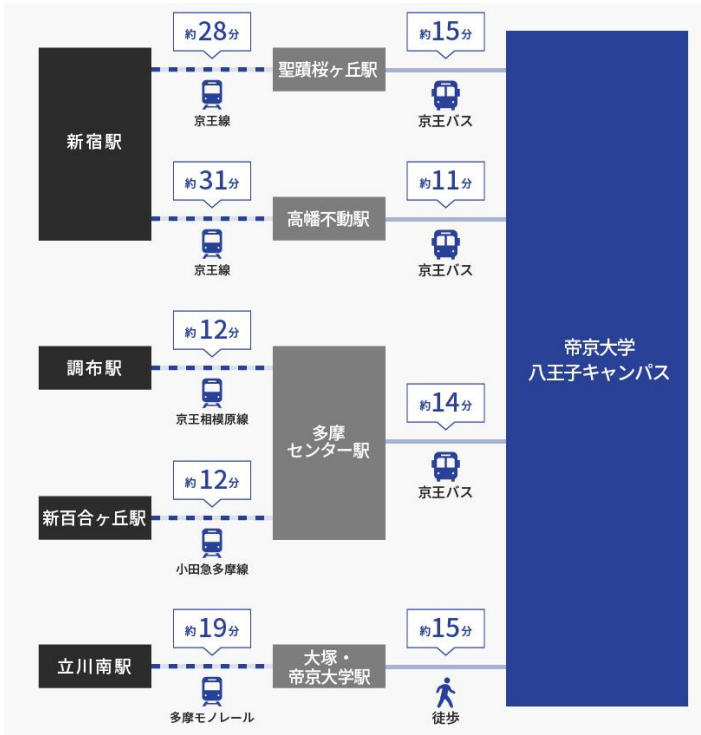
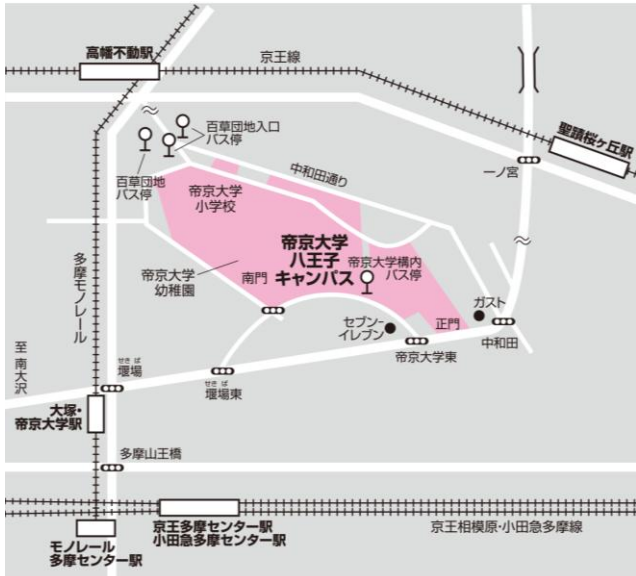
共訳書に

『功利主義をのりこえて』(A. Sen他)

『集団的選択と社会的厚生』(A. Sen)

『機会の平等』(J. Romer)など

会場アクセス



オスカー・ワイルドのThe Importance of Being Earnest (1895年)において、アルジャーノンは、ほとんど常に、「キュウリのサンドイッチ」や「マフィン」を食べています。バターをたっぷり塗ったパンに、向こう側が透けて見えるほど薄いキュウ리를挟んだcucumber sandwichは、上流階級の証なのでしょうか？それとも、アルジャーノンの奇矯性の象徴なのでしょうか？

村上春樹の小説の『ダンス・ダンス・ダンス』(1988年)においては、青山の紀ノ国屋で買った「ぱりっとした調教済みのレタス」「剃刀の刃のように薄く切って氷水でさらした玉葱とホースラディッシュ・マスタード」「バター・フレンチ」を使って、「スモーク・サーモン・サンドイッチ」が作られます。このサンドイッチは、村上春樹が「非日本的」であることの表われなのでしょうか？

こんなことを考えながら、ご一緒に、手作りサンドイッチを食べませんか？

